2019年7月31日　LP研資料

**「人付き合いの距離感」**

昔私の家に、今から６８年ほど前（昭和26年頃）、当時一緒に住んでいた「家族」の集合写真がありました。そこに写っていたのは、私の祖母、両親、父の姉夫婦、父の姉の夫の友人、祖母の姪っ子、そして産まれたての赤ん坊の私の合計8人でした。私の生まれた処は、東京の下町江東区深川で、昭和20年3月10日の「東京大空襲」で一面焼け野原となり、その5年後にようやく父が新しい家を建て、そこへ当時「焼け出されて、身寄りもなく、住む処にも困っていた」（縁のあった）人たちが一時期身を寄せ合って同居し、やがて私も産まれたという状況でした。

今思えば、「一言で、その関係性すら上手く説明できない」人たちが、一つ屋根の下で暮らし、想像を絶するくらいお互い「ストレス」を感じていたと思うのですが、その「写真」に写っていた人たちの表情は、不思議なくらい穏やかで、ほんとうに幸せそうな感じさえする「笑顔」だったのです。正直、「プライバシー」もヘッタクレもない環境で、表現しようもないくらい「超ストレス」も抱えていたと推察しますが、一方でようやく戦争も終わり、平和な世の中になり、文字通り雨露もしのげる家に住むことができ、一緒に暮らせる人たちがいるだけで、その「幸せ」をかみしめておられたのかも知れませんね。（後に、祖母も何度も当時のことを述懐していました）

あの壮絶な戦争を体験し、なおかつ家族や親しい友人も失い、絶望の淵から立ち上がって生き抜いた人たちの「メンタリティ」は、平和な時代しか知らない私など想像できないものであり、「人付き合いの距離感」もまったく違うものであると思います。

時は流れ、その「8人家族」も一人、二人と別々に住まいを持つようになり、世の中も「核家族化」が進み、おじいちゃんやおばあちゃんも「お盆」や「お正月」に会いに行く「家族」となっていきました。そんな世の中の移り変わりの中で、私も思春期（反抗期）を迎え中学3年生の時に、どうにも自分を抑えきれなくなり、一度だけ祖母に向かって「うるさいなぁー、〇〇ババア！」と怒鳴ってしまったことがありました。振り返れば、産まれた時からずっと可愛がってもらった祖母に、なんてひどいことを言ってしまったのかと猛省しましたが、当時15歳になった自分を、いつまでも子ども扱いしてあれこれと世話をやく祖母に対し、もう爆発寸前のフォッサマグナのようなものが溜まっていたのだと思います。

人間とは、実に「勝手な生き物」だとつくづく感じます。「独りぼっちで淋しい時」や「自分ではどうにもならず、人の助けが欲しい時」とかには、自分のちっぽけな「バリア」など飛び越えて、どんどん侵入してきて欲しいと切望するかと思えば、普段は「私の領空権は絶対侵犯しないでね！」と主張してはばからない存在ですよね。だから、いつの時代になっても、いくつになっても「人間関係（人との距離感）」は難しいと感じています。

最近、BSテレビで再放映している「フーテンの寅さん」の映画が、今の若者たちの間でも人気があると聞きました。たしかに、今の時代には本当に珍しい、まるで化石のような「超お節介だけど、超優しくて、いつでも親身になって接してくれて、なんでも悩みを聴いてくれるオジサン」であり、なかなか見当たりませんね。それが常に「孤独感」を抱え、「本音で語り合える場（仲間）も少ない」現代の若者たちにとって（全員とは言いませんが）、プライバシーもヘッタクレもないけど、とてつもなく「優しく、思いやりをもったオジサン」に対する渇望感のようなものがあるのかな？とも思います。しかし一方で、日常的に、あるいは自分の家の中に「寅さん」が居たとしたら、それはそれで「うっとうしい！（ウザい！）」と感じるのかも知れません！？

いやー、ほんと「人付き合いの距離感」って、難しいです・・・

以上